兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

大学院生による研究報告会

UNIVERSITY OF HYOGO

RESEARCH PRESENTATION

但馬の地域資源を考える。

（RRM大学院生の研究成果）

本研究科が開設されて間もなく9年目を迎えます。現在、20代から70代の大学院生が39名在籍し、但馬各地で調査に励み、研究に打ち込んでいます。地域資源マネジメント学の研究課題は、コウノトリの野生復帰やジオパークにとどまらず、歴史や地域づくりなど人間の営みを広く含んでいます。
今回の研究報告会は、大学院生12名の研究成果発表を予定しており、今後の但馬の地域資源マネジメントのあり方を展望します。

2022. 2/27（日曜日）13:00-17:00

PROGRAM　プログラム

13:00 - 13:10	開会
13:10 - 16:55	発表・質疑応答 • 伊藤　拓海（新温泉町の洞窟を利用した修験道の霊場） • 石井三重子（京丹後の漁港立地と地形地質は関係するのか） • 毛利　元紀（姫路周辺にかつて存在した大規模カルデラ） • 植木　祐次（水辺再生の水鳥への効果） • 末本　貴大（カジカガエルの選ぶ河道） • 藤田　大空（シュレーゲルアオガエルの産卵する場所） • 吉田和歌子（コウノトリの繁殖における雌雄の役割） • 波多野哲哉（チョウ類による里地里山の環境評価） • 佐川　渓太（「記憶の場」としての城跡） • 小山　元孝（寺社の由緒と地域社会） • 大石　　礼（遊休農地を「天滝ゆず」園として蘇らせた活動） • 田下　敬介（出石町の歴史的町並みと交通渋滞） （12名）
16:55 - 17:00	閉会

参加費

無料
※参加希望者多数の場合は、先着300名までとします。

実施方法

Webサービス（Zoom）を使用したWeb開催
※参加申込者に当日参加するためのZoomアクセス情報をお知らせします。

申込締切

2月22日（火）
※ただし、定員に満たない場合は当日まで受け付けます。

申込方法

Tel 0796-34-6079へ電話連絡、
もしくは氏名、住所、連絡先電話番号を記載の上
「研究報告会参加希望」と明記し、
メール（rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp）
またはFax（0796-22-5200）にて
お申し込みください。

兵庫県立大学大学院
地域資源マネジメント研究科RRM
〒668-0814 豊岡市祥雲寺128（兵庫県立コウノトリの郷公園内）
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス

TEL. 0796-34-6079
FAX. 0796-22-5200
E-Mail: rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp
http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm/

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科・ニュースレター［ニューズRRM］ No.25

但馬で学ぶ大学院

UNIVERSITY OF HYOGO

TOYOOKA GEO & KOUNOTORI CAMPUS

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科
豊岡ジオ・コウノトリキャンパス

但馬から始まる“何か”

NEWS［ニューズ］ RRM Regional Resource Management

UNIVERSITY OF HYOGO

コウノトリ舞う、山陰海岸ジオパークの地で地域資源マネジメントを学びませんか？

地域資源マネジメント研究科は、「地域に内在する自然・社会・文化のつながりを科学的に解明し本質的に理解する素養を身につけ、地域資源の発掘・保全・活用を実行できる人材の育成」を目的としています。全国でも貴重な地域資源（コウノトリ・ジオパーク等）が存在する兵庫県但馬地域を主なフィールドとし、2014年4月にスタートしました。

各コースの紹介

GEO【ジオ分野】
ジオ研究領域の「ジオ"geo"」とは「地球の」という意味です。大地と文化の関係について地形や地質の視点からひも解く研究をしています。研究を通じて、地域産業や教育の分野における新しい価値の創出や防災を支援します。

ECO【エコ分野】
再導入されたコウノトリの野生復帰に向けた、様々な専門分野の研究手法を取り入れた総合的な研究や、その生息場である田園に生息・生育する動植物の生態学的な研究を行い、その理論に基づく実践スキルを開発します。

SOCIO【ソシオ分野】
大地・自然・人間の関係の過去・現在・未来について、人文社会科学（歴史考古学・社会学・地理学）の立場から研究するとともに、私たちの社会を支えるさまざまな地域資源の保全や活用を考えます。

就職先例

- 豊岡市役所
- 山陰海岸ジオパーク推進協議会専門員
- 公益財団法人日本野鳥の会
- 環境コンサルタント会社など

4年間、土日に通うだけでも修了可能！

社会人も学びやすい仕組み

【長期履修制度】
職業を有している等の事情により標準修業年限では教育課程の履修が困難な場合、事情に応じて標準修業年限を超えて（3年以上4年まで）、計画的に教育課程を履修し修了することにより、学位を取得することができる長期履修制度を設けています。授業料の総額は一般履修と同じです。

【授業時間割】
木曜～日曜に開講。主な授業を木金土に開講し、毎年、開講曜日をずらします。このことにより、長期履修制度を活用している社会人学生が、土日に通学するだけで、全科目を履修できるようにしています。

C日程・第2回入試

入学試験

試験日　2022.3/6（SUN）（日）　願書受付　2/9（水）～2/22（火）

試験科目は小論文と口述試験です。　※英語の試験はありません。

TOYOOKA GEO & KOUNOTORI CAMPUS

地域資源マネジメント研究科

大学院修了生の研究紹介

地域資源マネジメント研究科は2014年の開設以降、様々な地域の課題に取り組んだ博士前期・後期課程修了者を送り出しています。本号では今までのNews RRMで紹介した研究成果を再掲載します。

GEO Study field［ジオ研究領域］

兵庫県北部における中近世金鉱業の技術的展開

―中瀬金山の鉱山臼を中心に―　熊谷　暢聡（2020年度修了）

兵庫県北部の但馬地域は、金や銀、銅などの金属鉱床が存在し、豊臣政権や徳川幕府から経済的な基盤として重視された地域でした。本研究は、金鉱山（金山）で用いられた「鉱山臼」と呼ばれる石製品の編年などを通じ、鉱業史の解明を目的としたものです。

中近世の金山では、採掘した鉱石を細かく砕き、水を利用した比重選鉱などを経て金を取り出しました。鉱山臼は、鉱石を微粉化する工程で用いる道具で、駆動方法を改良しながら全国で使用されました。ただ、本州西部では報告例が少なく、養父市の中瀬金山を中心に分布や形態などの調査を行いました。

中瀬金山は、16世紀後半から17世紀初期に多量の産金があり、豊臣政権への運上額は1598（慶長3）年、全国6番目の多さでした。城下町と同様の「金山町」が整備され、鉱山臼の残存状況から、金山町で金の製錬が行われていたとみられます。

鉱山臼は、主に金山町南側の八木川で採石可能な安山岩を加工して製作しました。直径30㌢前後の比較的小型で、18世紀初頭頃まで初源的な臼を使用していたと推測されます。佐渡金銀山など東日本では17世紀初期以降、改良タイプの臼が使われましたが、中瀬金山では認められず、東西で地域差が存在することが明らかになってきました。

但馬地域では、中瀬金山のほか、生野銀山（朝来市）や奥山金山、段金山（いずれも豊岡市）などにも存在します。但馬地域での活発な産金活動を裏付けるものです。

写真：鉱山臼

ECO Study field［エコ研究領域］

コウノトリのなわばり

―所有者と居候の関係―　桑原　里奈（2017年度修了）

コウノトリの社会は、一夫一妻でペアになり、なわばりを持つ繁殖個体と、なわばりを持たない単独個体（フローター）で構成されています。なわばり内では、核家族の形（ペア雌雄、その年の子供）で生活します。従って、家族以外の個体は一般的になわばり内での滞在を許されません。しかし、近年、家族でないにも拘わらず、滞在できる個体（居候）がいることが明らかになりました。そこで私は、なわばり所有者と居候の関係に着目し、あるペアを観察しました。

居候は、時に、なわばり内において所有者の攻撃を受けても、出ていきませんでした。また居候は、なわばり所有者にとって大事な資源である雛のいる巣にとまれる程、気を許されていました。ただし、所有者が巣にいるときは、巣にとまることができませんでした。さらに、非繁殖期になると、巣での滞在割合が増加しました。この時期、なわばり所有者は頻繁になわばりから出ていくので、居候が巣に滞在することによって、なわばり防衛の一助となっていることが示唆されます。この様に居候は、他の個体（侵入者）に比べ、なわばり所有者に許容される部分をもちながらも、家族同様ではありませんでした。つまり、なわばり所有者にとって居候は「他人以上、家族未満」の存在であることが分かりました。

写真：居候の着巣

SOCIO Study field［ソシオ研究領域］

農村地域における子どもの遊び空間

―集落広場の継承―　岡山　慎（2017年度修了）

雑草だらけで遊具も錆び付いている広場は、私が幼い時に毎日のように遊んでいた広場でした。それを見てふと寂しく感じたことをきっかけに、始めた調査研究です。地域コミュニティや地域活動の衰退等の影響により、遊び空間の継続的な維持管理が懸念されるなか、集落広場を後世に受け継いでいくべきものとして捉え、地域計画の視点から研究に取り組みました。

まず、子どもの遊び空間としての集落広場の現状を明らかにし、続けて、子どもの利用実態とそれに影響する要因について分析しました。結果として、場所利用に関わる基本的な項目（維持管理の状況、遊具の有無、遊び空間としての認識）、集落における位置関係（中心性、安全性、連結性）、農村広場を利用した活動量および種類が、子どもの集落広場の利用に影響する要因として捉えられました。

そのうち例外的なものではありますが、地区に住む小学生以下の子どもが一人もいないのに遊具を新しく更新し、集落広場を利用した活動も積極的に行う地区がありました。少子高齢化による影響が田舎の子どもの遊び環境の悪化にまで及んでいますが、集落広場を子どもの「遊び」だけでなく、大人の「遊び」をも許容する空間として住み続ける人たちが守っているケースがあります。そのような集落広場は、子どもの遊び空間、さらには集落を持続的なものへと変えていくためのひとつの鍵を握っていると考えています。

写真：日常的な遊び、イベントによく利用されている集落広場